

## 小谷部、森川両氏の年忌に憶う

船本文治

助さんと森川氏が富士見高原に手を携えて  
他界したのは、終戦の年の十二月十三日だ  
から、今年はちょうど両氏の三十三回忌の年忌  
に当たる。

両氏の追憶はいろいろあって、どれも私に  
は忘れるに忘れられない思い出である。いっ  
しよに登った山行やザイルを結んだ激しい登  
攀も忘れられないし、新宿や大阪の盛り場に  
遊んだこともまざまざと眼に焼きついて懐か  
しい。

が、それよりも私には、死を予感させる助  
さんからの絶望的な便りを貰いながら、何事  
もなし得ず、かえって森川氏までも死に至ら  
しめた口惜しさが、いまさらのように当時を  
想い起こして胸を衝く。

山岳部時代の仲間が次つぎと応召し、ある  
いは疎開や空襲でちりちりなるときに、助

さん、森川氏、私と三人で最後まで連絡をと  
って励ましあい、戦時下の耐乏生活のなかで  
同じ病氣と苦闘していただけに、私だけが残  
されたような気がして、なにかにつけて当時  
のことが想い出されるのである。

最近のアルプスの知識もなく、永い間山か  
ら遠ざかっていた私は、一昨年の秋、たまた  
ま社用で白馬に出かけ、八方尾根を散策する  
つもりが唐松頂上までぐいぐいと若者に劣ら  
ない調子で登ってしまった。その思いがけな  
い自信がきつかけとなって、昨年は意欲的に  
家内を連れて吹雪の立山に登った。劔ヶ御前  
から白く鏝った劔の尾根、谷をにらみながら、  
楽しかった昭和十二年夏の合宿を回想し、両  
氏の冥福を祈ることができた。

今年も年忌の供養のために、せひとも何処  
か、両氏と最もかかわりの深い山へ、静かに

登って霊を慰めたい。北岳か、鹿島槍か、穂  
高か、それとも蒲田に入って笠から穂高を見  
つめてみようか。

大阪在住の会員に誘いをかけてみたが、反  
応がないので、常盤スキースクールで常盤先  
生にお世話になっている愚娘が多少は山歩き  
もできるだろうと、娘と二人で出かけること  
に決めた。

北岳は、野呂川林道の補修工事と十七号台  
風による崩壊で、林道も電発道路も車が広河  
原に入らない。奥又白には天幕がないし、西  
穂は小屋の奥原守が松本に降りているという  
し、娘の岩歩きも気がかりだ。

いろいろと日程とコースに迷ったあげく、  
九月二十三日からの連休を利用し、夜叉神峠  
から広河原、白根三山、奈良田コースと決め  
た。

用心し過ぎて荷物の多かつたせいもあるが、  
大樺沢の登りで体力の衰えをいやというほど  
思い知らされ、荷物はすっかり娘に担いで貰  
う始末だった。

それでも、朝六時半に広河原ロッジを出て、

二時ごろやつと八本槍のコルに辿り着き、しばし黙祷、バットレスに漂う助さん、森川氏の靈の平安を祈ることができた。

昭和十六年のこと、助さんと、夏には北岳へ行こうと約束しながら、果たせなかった。いま私が来ると知って、森川氏を誘って二人で、きつと来てくれている。そう思って、折から岩に動めくガスの中をじつと見つめながら、在りし日の両氏の若き情熱を追想し、長いこと坐りこんでいた。

それからガラガラ道を頂上に急いで、暗くなってから、やつと稜線小屋に辿り着いた。

翌日も、間ノ岳、農鳥岳の登りでひどく荷物に難渋し、大門沢小屋に着いたときは、寥々たる夜の闇が狭い谷を押し包んでいた。

船には勝てない、そんな苦勞もあつたが、台風のせいでの小屋にも人が少なく、白根はどこもひっそり閑として、晩秋の弱い光と谷から吹き上げるガスの交錯のなかに息づいていた。

それが私には、両氏の菩提寺に行つて、静かに裏の墓地を歩いてきたような気がしてな

らない。

両氏の他界した年のいま時分は、助さんは富士見ではうれん草を育て、森川氏は茂原で実りの秋を楽しみながら、アルプスの峯々にやるせない想いを馳せていたことであろう。

もし、あの時に私が健康を害さずにいたら、両氏のためになにかできたろう。そして、そのうち、みんなが復員してきて、なんとかなつたらうに。

いつまでも、そんなことを想つて、悔んでいる私である。

(一九七六、一〇、一〇)

× × × × ×

助さん、森川氏の突然の訃報による衝撃でふたたび有熱状態に逆戻りしていた私は、明けっぱなしの窓から射し込む光に春のきざしを感じられるところに、ようやく元氣を取り戻した。

原君の戦死を知り、常盤先生のお消息も判つて、先生からは原君や岩崎君の米谷ゼミ一年先輩の齊藤氏が米沢で検事をしてる旨の便りをいただいた。

そうこうして、春も過ぎ、裏の田圃に心よ

い秋風が稲穂をなでるところになると、病氣の急速な快復が肌で感ぜられ、田圃に続く吾妻山やあたりを取り巻く蔵王、朝日、飯豊の山嶺は、私の心をいやがうえにも掻きたてた。

こうなると、助さんがやったように、私も山へ登つて、積極的に自分の健康を試してみたくなる。

それに秋の米沢は、果物も豊富だし、米も野菜も、顔を使えば、わりとらくに手に入る。齊藤氏に、常盤先生を山の出湯と吾妻山にお誘いしようと提案すると、山へ行ったことがないので、いちど、ぜひ案内してほしいという。

米沢駅に、先生のお元氣な登山姿を見たときは、まったく嬉しかった。

戦争中のもろもろのこと、ページのことなど、話は尽きない。なによりも、助さん、森川氏の他界するまでの様子をお話しできて、心の安らぎを得た。

なだらかに連なる吾妻山は、高く澄み上がった空を限つて、日ごとに秋の色を濃くし、

五色、姥湯、太平、高湯など、私を育てた出で湯を抱いて、田圃を距てて横わっている。

栄養一つ摂れない、じり貧の大阪に、早く見切りをつけて生き残り得たことの幸せを、しみじみと噛みしめた。

三人行く山路の秋は急がれて

敗戦の去年を語りぬるかな 敏太

たしか、滑川から姥湯への登りであったように記憶する。先生から、此の一首を詠まれて、私は思わず、はっと立ちすくんだ。さきほどから、助さん、森川氏それに原君のことを憶い、下を向いて久しく、深い感慨に沈んでいたのである。

私は気を取り戻して、あわてて斎藤氏の跡を追った。

山は一面に明るい秋の陽をうけて、紅葉に急いでいた。その時の光景だけは、いまでもはつきりと目に浮かぶ。

終戦早々にパージで大学を去られた先生には、山岳部長時代のこと、なににもまして懐かしく想い出されるのだろうか。

いまでも先生のお宅に伺うと、例によって

先生の話は百八十度飛び火するが、じっと聞いているうちに、必ず助さん、森川氏の追憶が語られる。

すると、いつも私は目がしらが熱くなり、先生の声が聞えなくなるのである。

(一九七六、一〇、一〇)

× × × × ×

凍傷の影響も多少はあったのか、卒業後思わぬ落し穴に、次つぎと療養を強いられた私は、山岳部時代の仲間がほとんど出征して行ったあとも、助さん、森川氏とは、最後まで連絡をとり、互いに励まし合って闘病生活を続けていた。

そのころに両氏から貰った数多い書翰は、療養中のしばしばの引越にも、筐底に藏って保存してきたのだが、封筒も便箋も、茶色にしみが着き、虫が喰い、埃がこびりつき、裂けているものもあるうえ、両氏のこととは会報に掲載された望月さんの随筆もあることだし、もう探って置くこともないだろうと、昭和四十五年秋の神戸への転宅後、はつりばつり本棚を片付けたさいに、おおかた廃棄してしま

った。

すると、間もなく昭和四十六年十二月の会報に、柿原さんが、房州茂原の寺院からの書翰、「実は森川君には、昨年十一月甲州の山に居りし友人の招きにより出発し、翌日遂に死亡致し、其友人も二時間後、共に黄泉の客となりました。十一月十二日でした。」を資料として公表され、「前掲資料によると両君の死去は昭和二十年十一月十二日、望月随筆によれば同年十二月十三日となる。」と両者の喰い違いを指摘された。

そのとき、すぐ私は忘れもしない森川氏の御母堂様から頂戴した昭和二十年十二月二十日付富士見高原発信の「真三郎は小谷部さんに会いに行くといつて出発し、途中雨に打たれて風邪をひき、十二月十三日、小谷部さんといっしょに死亡したので、遺骸を引取りに富士見へ来ました」と、涙でしたためられた手紙は、おそらくこれも整理してしまつたのではないかと危惧しながら探してみたが、やはり残っていないかった。

幸いなことに、私が昭和二十五年、ただみ

ずからの心をいやすために、両氏の想い出を書きとめておいたメモを調べてみたところ、望月さん随筆が正しかったので、ほっとしてそのことはそのままにした。

ところが、先ごろ、まだ残っている書翰を讀み返しているうちに、昭和二十四年十二月日本山岳会発行の「山岳」に望月さんが筆にされた追憶文の末尾の「小谷部全助君年譜」に「昭和十六年八月末の笠ヶ岳」が脱落しているのに気づいた。

助さんにとっては、そんなことはどうでもよい、登山というより療養を兼ねたような山行であったのだから。

それよりも、両氏から貰った書翰が、われわれの仲間のほとんどが出征中のものであるだけに、そのまま私して、藏ってはいけなかったのではないかと、いつて、私的なことがらをそのまま発表するわけに行かないから、謄写して両氏を知る御関係の方だけでなく、お送りすべきでなかったか。そんな反省が、いまごろになって私の胸に湧いてきた。たしかに、いま残っている分を讀み返して

みても、どれもが激しい山の友情がこもっていて、とりわけ助さんの絶筆となった書翰などを讀むと、私には岩場でどうにもならない極限の状態で苦闘しているような緊迫した気持ちに追いやられる。

素のまま公表するのは差障りもあるが、だからといって、謄写するのも億劫だし、また部分的に抽出しながら随筆風に纏めるほどの私には筆の力もなし、あるいは差障りある箇所だけ部分的に省略すると、助さん、森川氏らしい人柄が出て来ない。

そういうわけで、どうせ会員は同じ釜の飯を食う身内みたいなものだから……そう思つて、両氏からいえば、余計なことをするなと、墓下から叱られるかもしれないが、素のまま会報に掲載方をお願いすることにした。

(続く)

